

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 4 日現在

機関番号：12601
 研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2009～2012
 課題番号：21760499
 研究課題名（和文）16世紀トスカーナ大公国の祝祭と都市-1589年の婚礼祝祭と大公国内の都市整備-
 研究課題名（英文）
 Urban space and festivals in the Grand Duchy of Tuscany of the 16th century
 -Wedding Entry of 1589 and Urban Infrastructure projects in the Grand Duchy-
 研究代表者
 赤松 加寿江（AKAMATSU KAZUE）
 東京大学・大学院工学系研究科・助教
 研究者番号：10532872

研究成果の概要（和文）：

本研究は1589年の大公フェルディナンド1世とクリスティーナ・ディ・ロレーナの婚礼に際する婚礼巡幸と新婦が経由した都市における空間整備の関係について、都市史的観点から分析した。その結果、領域的視野をもった大公の領域設計において重点的な整備をなされた第二の首都ピサ、そして宮廷移動のインフラとしての役割を担ったヴィラ・アンブロジャーナにおいて、婚礼巡幸と空間整備の緊密な相関関係を見いだすことができた。

研究成果の概要（英文）：

In this thesis it is analyzed a relation between the wedding entry of 1589 and urban infrastructure projects of cities in which the new grand duchesses *Christina de Lorena* visited. As a result it was revealed that the urban structure were revalued through festivals in Pisa and in the case of *Villa Ambrogiana* the renovation project had been proceeded and it was defined as a new infrastructure of courts.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：建築史・意匠

科研費の分科・細目：

キーワード：イタリア、都市史、祝祭、ルネサンス

1. 研究開始当初の背景

古来から世界各地で行われている人間の営みのひとつに祝祭がある。祝祭は政治、経済、社会の複層構造を表すとともに、舞台となる都市空間の変化や改造と無関係ではありえなかった。とくに祝祭が芸術文化政策として主

要な局面でおこなわれたルネサンス期イタリアにおいて、祝祭は新たな都市像を視覚化し、都市空間を再定義する契機を与えた。

これまでルネサンス期の祝祭と都市の関係についてはR. ストロングによる社会史、美術史的研究を皮切りに、祝祭が都市社会に及ぼ

した影響力、政治性が示唆されてきた。A. T. マッテイーニにおいては祝祭の行列順路から都市空間に体现された政治的意義に関する指摘を行っている。しかしながら、都市史的観点から都市空間への具体的な影響や領域的視野における婚礼巡幸の意義については解明されてこなかった。以上のような学術的背景において、本研究は領域支配の確立期にあった16世紀トスカーナ大公国の婚礼巡幸と都市空間の関係について、都市史的観点から検証を試みるものである。

2. 研究の目的

本研究は1589年に行われた第三代トスカーナ大公フェルディナンド1世とクリスティーナ・ディ・ロレーナの婚礼祝祭において、クリスティーナが巡幸した都市空間を対象とする。国際的な婚礼祝祭が領域支配においてどのような役割を担い、トスカーナ大公国の地方都市の都市整備にどのような影響を与えたのかについて、領域的視点から明らかにすることを目的としている。

3. 研究の方法

本研究の具体的な対象地は新婦クリスティーナがフィレンツェに至るまでに訪れた1) マルセイユ、2) モナコ、3) リヴォルノ、4) ピサ、5) カッシーナ、6) ポンテデラ、7) サン・ロマーノ、8) エンポリ、9) アンブロジーナ、10) ポッジョの10都市である。

これらの地域において、1589年の婚礼祝祭に関連する文献史料と都市図、絵図史料を入手し、テキストから視覚的、空間的な様態を再現する方法を用いた。

主な史料の入手先は、フィレンツェ国立図書館、フィレンツェ国立古文書館、ピサ大学図書館、フランス国立図書館、マルセイユ歴

史博物館であり、アンブロジーナについては、モンテルーポ図書館である。

4. 研究成果

本研究の主な成果は以下の3点に要約できる。

(1) トスカーナ大公国とフランスの祝祭史料にみる1589年の婚礼の位置づけの相違

1589年にフェルディナンド1世と結婚したクリスティーナにとってフランスを発つ最終港となったのがマルセイユであった。

16世紀マルセイユで刊行された歴史書、都市図、古地図を収集した。当時のマルセイユの記録を所蔵するエクス・アン・プロバンスのアルボー図書館においては、1589年のクリスティーナの来訪を記す希少史料であるR. ルッフィによる『記録』(R. Ruffi, *Memoires*, 1589)を入手することができた。その結果、クリスティーナの来訪が完記録されていないことが明らかになった。一方、R. グアルテロッティ、G. パヴォーニ、B. ロッシなどフィレンツェ側が記した史料では、華々しい都市祝祭の様子が記録されている。こうした史料上の食い違いは、当時のトスカーナ大公国とフランスの間の婚礼の価値的相違を示している。同時に、主催側のトスカーナの祝祭記録が国家的権威の喧伝材料であったことから、祝祭が事実と反して理想的に描かれうることを呈示してもいよう。以上、この成果は祝祭史料の国際比較という方法が、多角的な国家像を描画する方法を与えていたと考えられる。

(2) ピサにおける伝統祝祭と婚礼祝祭

1589年の婚礼祝祭は、トスカーナ大公国内でフィレンツェとピサにおいてのみ行われたことが明らかになった。クリスティーナのピサへの来訪に際して、ジョコ・デル・ポン

テというピサの伝統祝祭が行われたことがチェルヴォーニの史料から明らかになった。ピサはコジモ1世の時代から、トスカーナ第二の首都とすべく都市改造が行われていた都市であり、都市の中心を流れるアルノ川と橋は都市構造の根幹をなし、象徴的な空間構造であった。都市の象徴的空間を舞台とする祝祭が行われ、大公が馴致をはかるピサ貴族と新しい大公妃が接触をもったことから、ピサの都市における大公妃の歓待祝典は都市空間および都市社会において重要な契機となっていたことが唆された。また、伝統的な祝祭を復興し、大公の祝祭に披露する点は、フィレンツェの伝統的祝祭の聖ヨハネ祭が都市の伝統と大公の権威を標榜すべく採用されたのと同じであり、トスカーナ大公国における祝祭政策の一貫性を示すものであった。



図1 Anonimo, *Veduta del Ponte di Pisa nell' atto del Guoco*. Pisa, 1807.

首都フィレンツェに対して第二の首都として位置づけられていたピサにおける、大公の祝祭の分析は、領域支配における中央と地方の相似性と差異性を提示したといえる。この成果は、比較都市史という領域において、祝祭という事象を対象とした極めて新奇的視点をもつ研究として位置づけられる。

また、ピサのジョコ・デル・ポンテとフィレンツェの聖ヨハネ祭を比較することを通

じて、祝祭によってかたちづくられる社会構造と都市空間の有り様について、トスカーナの比較空間史という視点から、さらなる研究の展開が可能だと考えられる。

(3) インフラとしてのヴィラ・アンブロジーナーナの整備と意義

クリスティーナが滞在したヴィラのひとつにヴィラ・アンブロジーナーナがある。出納記録によるとこのヴィラの改修整備は、1587年11月2日の数日前から1590年1月27日に行われており、フェルディナンドの大公就任の最初期に着手した建築事業の一つであったことが明らかであると同時に、これはクリスティーナが滞在するためのヴィラの整備でもあった。

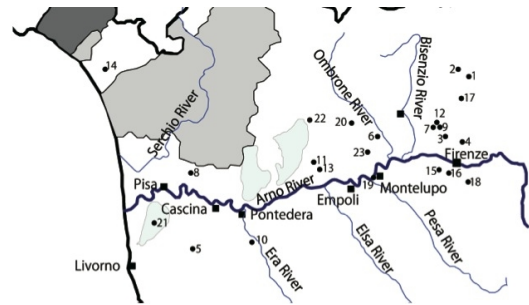


図2 トスカーナ領域におけるヴィラの立地

19: ヴィラ・アンブロジーナーナ

フィレンツェと海をつなぐアルノ川の舟運の中継地に立地するこのヴィラは、その後、面するペザ川の流路を変更することによってアルノ川に直面し、さらに交通上の利便性を高める。とくにフランス宮廷にならい、「移動する宮廷」をはじめたフェルディナンド1世は、このヴィラを徴用し領域内の移動を活性化させた。つまり、このヴィラは宮廷のインフラとして機能したといえ、クリスティーナの巡幸における利用はその最初の試行ともいえるものだった。フェルディナンドによる移動する宮廷の記録は多数あり、彼の領域支配が季節ごとの宮廷移動や祝祭の巡幸を

恒例化することによって徹底され、そのためにヴィラや小都市が彼の領域支配を支える拠点として機能していたという実態を示すことができた。

またヴィラ・アンブロジャーナの改修計画、河川の流路変更の事業主体であった土木技術者組織カピターニ・ディ・パルテの役割にも着目し、彼らの役割が土木工事からヴィラにいたる領域内の大小様々なスケールのインフラに介入していたことを浮かび上がらせることができた。

こうした成果はヴィラを地理的観点と領域支配におけるインフラとして読み解く、新たな視角をもつものである。美術史や建築史によるモニュメント論として豊かに展開されてきたこれまでのヴィラ研究の枠組みを一度外し、ヴィラを領域支配の流通と生産のインフラとして位置づける新たな視角を提示するものである。

ローマ大学パオラ・ファリーニ氏からも、本研究の成果はイタリア国内においてもインパクトを有するものとの評価を得ており、ヴィラを切り口とした領域都市史研究の可能性を切り開いたということができよう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

- i. 赤松加寿江, 「コジモ1世によるピサの第二首都化構想とサント・ステファノ騎士団」『都市と表象シリーズ<宗教が都市に立ち現れるとき>論文梗概集』2010年, 3-8頁
- ii. 赤松加寿江, 「コジモ1世によるフィレンツェの美観—1551年の都市法令を中心に—」『特別研究 [若手奨励]・8 国際的・都市史観点からみた都市再生論に関する研究論文集』, 2012年, 75-80頁

iii. Kazue AKAMATSU, “Villas and the Arno River Basin in Tuscany”, in *Space, Culture, and Regeneration of Cities in History, From the Viewpoint of International Comparison of Territory and Infrastructure, International Symposium Proceedings*, 2012, pp.152-161.

iv. Kazue AKAMATSU, “The Control of the Arno Basin and Villa Ambrogiana in the Late Sixteenth-Century in Tuscany”, in *Territory and Urban Settlement along Water, Comparative Studies on Friesland and Other Areas in History*, 2012, pp.39-51.

v. 赤松加寿江, 「フェルディナンド1世のアルノ川流域における領域支配とヴィラ・アンブロジャーナ」, 日本建築学会学術講演梗概集, F-2建築歴史・意匠, 2012年, pp.951-952.

vi. 赤松加寿江, 「フチェッキオ沼とメディチ家のヴィラ」『年報都市史研究』第21号, 2014年3月 (刊行決定)

[学会発表] (計5件)

i. 赤松加寿江, 『コジモ1世によるピサの第二首都化構想とサント・ステファノ騎士団』「日本建築学会 シンポジウム「都市と表象」 2010年12月22日 日本建築学会会館

ii. Kazue AKAMATSU, “Villas and the Arno River Basin in Tuscany”, in *Space, Culture, and Regeneration of Cities in History, From the Viewpoint of International Comparison of Territory and Infrastructure, International Symposium*, 2012年12月4日, 東京大学

iii. Kazue AKAMATSU, “The Control of the Arno Basin and Villa Ambrogiana in the Late Sixteenth-Century in Tuscany”, in *Territory and Urban Settlement along Water Comparative Studies on Friesland*

and Other Areas in History, International Round-table, 2012年9月18日, Orange Hall, Leeuwaden

iv. 赤松加寿江, 「フェルディナンド1世のア
ルノ川流域における領域支配とヴィラ・アン
ブロジーナ」, 日本建築学会大会, 2012年9
月14日, 名古屋大学

v. 赤松加寿江 「イタリア・トスカーナ地方ア
ルノ川流域における沼とヴィラ」, 都市史研
究会シンポジウム, 2012年12月16日, 東京大
学

〔図書〕(計1件)

i. 野口昌夫, 赤松加寿江, 石川清, 稲川直樹,
桑木野幸司著 『ルネサンスの演出家 ヴァ
ザーリ』 白水社, 2011年, 271-345頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

赤松 加寿江 (Akamatsu Kazue)

東京大学・大学院工学系研究科・助教

研究者番号：10532872

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし